

女性の子育て意識と母性観

高石 恭子

甲南大学文学部教授、学生相談室専任カウンセラー。専門は臨床心理学で、今回のシンポジウム全体の企画を担当。女性の身体性の問題や「母親になる」ことについて多数の論文を発表。子育て中の母親には、インターネット上で子育ての悩みに答える「子育て相談（へこころ）」の回答者としても知られている。

子育てに関する意識調査の結果から

本日お越しいただく予定だった汐見先生は、父親がどのよう
うに子育てに参加できるのかを論じ、日本では、男性が個人
として父親であることが難しいと指摘しておられます。また、
先ほど中里先生からお話がありましたように、男性原理で突っ
走ってきた日本の社会において、子育てのしやすい働き方を
男性が選択することは、現在でも困難です。育てることの難
しさを解決していく最大の手掛かりは、男性原理や父親にあ
るのではないかと思えます。

けれども、実はいちばん見えにくいところがあり、見えに
くいからこそ最もやっかいな問題は、女性自身の側にありま
す。それは「母親とはこうあるべきではないか」という文化
的な刷り込み、母性神話と言われる価値観です。女性が無意
識に自らをこの価値観によって追いつ込んでいく点に、案外大

きな困難が含まれているのではないかと、私も女性の一人と
して感じています。今日はそのあたりを取り上げてみたいと思
います。

最初に、子育てを巡る今日の状況について、身近なところ
からデータを示したいと思います。甲南大学では文部科学省
学術フロンティア推進事業の一環として、二〇〇〇年度から神
戸市東灘区を中心に、子育てに関する意識調査を何度か行っ
てきました。今年はそのシリーズの第二期目としまして、中
里先生や司会の穂苅先生にもメンバーに入っていたいただき、東
灘区内で大規模な調査を実施しました。対象は、区内の全公
立保育所と公立幼稚園に在籍する子どもの保護者と、甲南大
学カウンセリングセンターの子育て支援グループ「うりぼう」
参加者、計二〇〇〇名です。今日これからご報告するのは、
現在回収と入力済の五八三名分の途中経過です。ご協力いた
だいた方がこのフロアにも来てくださっているかもしれませ
んので、この場を借りて御礼を申し上げます。

主なものを駆け足でご紹介します。調査対象となった保護
者の子どもの年齢は、四〜五歳がいちばん多く、子どもの数
は二人がもっとも多いです。保育所と幼稚園に通わせている
保護者がほぼ同数で在宅は七名だけです。回答者の九九％は
母親で、平均年齢は三四・九歳です。

だいたいのところは六年前と変わりませんが、大きく変わっ
たところを挙げてみます。出産時における父親の立ち会いは、
二〇〇〇年度の調査では三割強です。このときは調査対象に
母子同室や出産の立ち会いを推奨する助産院・病院が二割ぐ

らい含まれておりましたので、一般的には二〇％台ぐらいだったのではないかと思います。今回の調査では、ほぼ半数の方が立ち会っているのです、この点では父親の参加度が六年間で大きく変わっていると言えます。母親の職業は、出産一年前は常勤で働いている方がいけば多いのですが、出産後はほぼ半数の方が専業主婦になっています。常勤で働いていた方の約三分の一は辞めています。

次に子育てに対する意識について、抜粋してご紹介します。「毎日の子育てが楽しい」という項目に「非常にそう」「まあまあそう」「あまりそうではない」「ぜんぜんそうではない」の四つから選ぶ形式で答えていただいた結果、「非常に楽しい」と「まあまあ楽しい」を合わせると九〇・四％になりました。「子どもの成長している姿をみるのが嬉しい」も「非常に嬉しい」と「まあまあ嬉しい」を合わせると九九・三％で、ほとんど全員の方が楽しくて嬉しいと答えています。私は、本当かなとまずこの時点で思うわけですね。日々いろいろな相談を受けている実感とは遠い数値が出ています。

このあたりを細かく、質問ごとの回答をもとに見ていきますと、やはりそう単純ではないことがわかってきます。「自分の生き方も大事にしたい」は「非常にそう」と「まあまあそう」の合計・以下同じ）九三・八％。一方「子育てのために自分が犠牲になるのは仕方がない」も八三・八％と、ほとんどの方が「そう思う」と答えています。自分の生き方は大事だと思っているが犠牲も仕方がない、子育ては犠牲だということに同意しているわけです。そして「経済的な必要がなければ

ば、子どもが小さい間、母親は仕事をせずに家にいた方がいい」に六八・一％、「子どもが小さい間は、家事・育児に専念したい」にも六四・五％の方が「そう思う」と答えています。いわゆる三歳児神話と呼ばれる考え方は、このように行きわたっています。

一方「家事・育児以外に自分の仕事を持っている」とは、先ほどの質問の真下にあるにもかかわらず、これも六七・五％の方が「そう思う」と答えているわけです。ということは、家にいたほうがいい、家事育児に専念すると答えている同じ方が、それ以外のことをしたいと答えている。ここから見えてくるのは、非常にアンビバレントな子育て感情、子育て意識を女性を持っているということだと思います。

育児ストレスに関する質問項目がいくつもあります。「子どもを育てることに張りつめた緊張を感じたことがある」「子どもを叩きたいと思ったことがある」「子どもが育てにくい子どもと感じて悩んだことがある」等の一五項目について、「よくある」「ときどきある」「あまりない」「めったにない」の四件法で回答していただきました。それを得点化し、合計値を「育児ストレス得点」として比較したものです。二〇〇〇年度の平均値が三〇・八九、二〇〇六年度は二九・九九です。統計上は五％水準で有意差が出ており、やや減ったかなというところですが、育児ストレスの点では、東灘区内ではそう悪くはなっていないと言えます。これらの中で特に顕著な変化があったのが、「子どもを育てることに張りつめた緊張を感じたことがある」という項目です。「よくある」「ときどきある」の合

計が六年前は六一・一%だったのが、今回は四一・〇%に下がっています。孤軍奮闘している孤立感から来る緊張、ピリピリした感じは和らいできているということが出ています。

続いて「子育てで何か知りたいと思ったときに、いちばん頼りになると思うものは何か」という質問で、上位三つを選択していたできました。多い順に、自分の母親、友達、育児雑誌となっています。専門家の書いた育児書、公的な冊子はほとんど見ていないようです。専門家（教師、医者、カウンセラー）はその下になります。最近の若いお母さんは最初の三つで必要な情報を得ていて、理想よりも身近なアドバイスを求めているという傾向が表れていると思います。実は、この選択肢を作った後で気がついたので、「配偶者」を入れるのを忘れていました。返ってきたアンケート用紙を見て、そのことに対するクレームが一件も見つからないのです。ということは、やはり最初から配偶者はあてにされていないのかなと思います。

次は、父親の子育て参加の項目で、ここも非常に変化が見られました。子育てに協力的かどうかという質問に「非常に協力的」「まあまあ協力的」を合わせると七六・八%。これも意外に高く、東灘区内のパパは合格点かなと思います。ただ、子どもと一緒に過ごす時間が十分かどうかという点、「時間が十分でない」が六二・八%。気持ちはあるけれども、実際にはなかなか手をかけてもらうことが難しいということですが、「家事をしない」には半数以上がそうだと答えています。子どもの世話をするかどうかという質問には六九・五%が「し

てくれる」と評価されています。まあまあ頑張っているということですね。

「夫は、子どもが小さい間は妻に仕事をせずに家にいてほしいと思っているかどうか」に対し「思っている」が四八・九%。先ほどのデータで、自分自身が家事育児に専念したいと答えた女性は六八・一%でしたので、今のお母さんは夫に期待されるからというよりは、自分自身の気持ちとして、家にいたいと思っているようです。「夫婦でよく子どもの話をする」は、八割以上です。「関心事や悩みなど、現在のあなた自身を理解してくれていますか」に対しては「非常にそう」「まあまあそう」を合わせると六四・八%です。これらから見えてくるのは、それなりにと言っているのか、非常にと言っているのか、やはり頑張ってきている父親の姿です。六年前からの変化はかなり大きいと思います。

全体として、子育て環境はそう悪くはなっていないという結果が出てくるのですが、一方でいろいろな深刻な事件との兼ね合いで見ると、本当にそう思っているのかという疑問もわいてきます。その手掛かりが、女性側のアンビバレンス、相容れない気持ちを同時に持っていることにあるのではないかと思います。

子育て意識の二重性

私が先ほど企画趣旨のところを話をした子育てのネット相談室に寄せられた相談の中に、次のようなものがありました。四人の子どもがいるお母さんで、再婚家庭を築いていて、今

は最後の子どもを育てています。一歳半健診で「子育てが楽しいですか」という質問項目に「楽しくない」と答えたら、保健師さんに非常に訝しがられて、根掘り葉掘り聞かれたそうです。三歳児健診に行つて、今度は「どちらでもない」と答えたら、また呼び出されて、「どうして楽しくないのか。夫は協力してくれないのか。離婚に問題があるんじゃないか。前のお子さんとの関係はどうか」とか、非常に批判的にあら探しをされて、「それは納得がいかない、どう考えたらいいのか。どうも今の日本には子育ては楽しいと言わねばならない」という圧力があるのではないか」という「相談だったのです。その相談を寄せた女性にしてみれば、子育てとはそんなに単純な感情でできるものではないし、いろいろな苦労も経験する。確かに子供を育てる責任を果たしているという深い喜びはあるが、楽しいか楽しくないかと言われれば「どちらでもない」と答えるのがいちばん自分の気持ちに近いということです。「楽しいか、楽しくないか」という質問で問われてしまうと、圧力を自分の中で感じつつ「楽しい」と答えてしまう部分もあるのではないかと私は感じました。

子育てが本当は楽しいのかということについて、いろいろ考えてみました。少し問い方を変えてみると、また違った答えが出てくるのです。「子どもを産み育てるのは何のためですか」という問いにしたら、どう答えるでしょうか。柏木恵子さんがまとめていますが（『子どもという価値——少子化時代の女性の心理』、中公新書）、子どもを産み育てることの意味は、貧しい国ではたいいてい経済的な価値、働き手としての実

用的な価値が大きいです。経済的に豊かな国になると、だんだん精神的な価値の方に重点が移動していき、「自分が成長するため」という答えが多くなる傾向があります。

一九八七年の総務庁の国際調査の結果を示します。「なぜ子どもを産み育てるか」という質問に答えたものです。日本では「家の存続のため」ということはあまり感じられていなくて（一九・三％）、タイや韓国では高くなっています。日本では「出産、育児によつて自分が成長する」と答えている人が、欧米と同じような傾向で出ており（三八・二％）、タイ・韓国では低いです。ところが「子供を育てるのは楽しい」という人は、欧米では高くなっているのですが、なぜか日本は非常に少ないのです（二〇・六％）。日本は欧米的なところとアジア的などところと、両方のミクスチャーになっています。これは二〇年ほど前の調査ですが、八年後の一九九五年に同じ項目で総務庁が調査した国際比較の結果によると、韓国の大きな変化が出ており面白いのです。韓国の価値観は、八年前で急激に欧米化しています。ところが、日本では依然として楽しいと思える人が少ないのです。この明らかな違いはすごく興味深いと思います。

日本は、表面的な意識では欧米化が進んで、自分のために育てるという意識が高くなってきているのですが、それが楽しみに結びつかない。つまり、底に流れているものと非常にずれた表面的意識があり、子育て意識の二層化が起きていることが推測できるのです。この二重性、アンビバレンスは、ダブルバインドと言つてもいいと思います。これがどのよう

に育まれてしまったのか、母から娘に受け継がれてしまったのかということ、難しい問題だと思います。私自身が一九六〇年生まれで、戦前生まれ戦後育ちの母に育てられましたので、この二重性の問題に最も直面させられた世代だろうと自覚しています。私の母の世代が娘に伝えたこの二重性をあえて単純化してみましよう。母の世代には、戦前の「母性観」が生きている一方で、戦後の教育により個を実現する女性像が刷り込まれています。子育ての上では、娘に対して「個を実現しなさい。これからの男性社会で生きていけるように頑張らなさい」と教育ママと化して、おしりをたたいて叱咤激励する。一方で自分は「私はもういいのよ」と言って、贅沢をせず、節約して「あなたに全部託してあげるから」とすごく頑張る。つまり、母性とは自己犠牲であるというメッセージを暗黙のうちに出しているわけです。出てくる言葉は、「個を実現しなさい」しかし行動では自己犠牲的母性を示している。それらをずっと与えられて成長したのが、今の子育て期から少し上ぐらいの女性ではないかと思えます。

二重性の歴史

この二重性がどのように育まれてきたのか。その長い歴史を見るために、私は人魚の物語を研究しています。母から娘に、女性がどう生きるか、母性はどうあるべきかをいかに伝えてきたかという歴史を、人魚の物語の変遷から見えていきたいと思います。

まず、娘が子どもを産んで母になるという循環をしていれ

ばそれでよかった時代が長くあります。人魚の物語が悲劇になるのは近代になってからですが、欧米ではアンデルセンの『人魚姫』が有名です。海の中にいた人魚姫が陸に憧れて、痛みを我慢して陸に上がるのですが、王子さまに愛してもらえなかったら魂すらもらえない。お姉さん人魚たちが、長い髪と引きかえに魔女から短剣をもらおうという自己犠牲を払って、「もういいから王子を殺して海へ帰っていらっしやい」と人魚姫をもう一度海に戻そうとしますが、人魚姫はあえて陸に残る選択をして、最後は泡となって消えてしまうという非常に悲しい物語です。

日本にも大正時代に、小川未明さんの有名な『赤いろうそく』と『人魚』という童話があります。これは母人魚が海の中にいて、こんな暗くて冷たい陰気な世界で娘を育てたくない、娘だけは陸の明るいところに出してやりたいというので、お母さん人魚は陸に行って赤ちゃんを産んで帰るわけです。人魚はおじいさん、おばあさんに拾われて育ちますが、結局は見せ物にされかけて、船でどこかに連れて行かれそうになります。そのとき、お母さん人魚が怒り狂って海を大嵐にして、船を自分の娘もろとも海に飲み込んで殺してしまう。これも非常に悲しい物語です。

現代になると、戦後アメリカでランダル・ジャレルソンという詩人・作家が『陸に上がった人魚のはなし』という作品を残しています。人魚はやはり陸に憧れて、海辺へやってきます。そこに男性が待っていて、二人で非常に慎ましい生活を始めます。どちらも自分の世界に合わせることを強要せず、

思いやりをもって互いの世界を認めつつ、カップルで幸せになろうとする。しかし、お母さん人魚が「よいものはみんな海の中にある」と言い続けるので、人魚は仕方なくお母さんを捨てて陸に上がります。言ってみれば、象徴的に母親を殺すのです。そしてカップルの生活を実現しようとはしますが、子どもを育てるときに、自分のお母さんを海に見捨てて来てしまったので、どうしていいかわからない。熊の子などの動物を拾ってきて育てますが、熊が冬眠したら、「死んじゃったんじゃないか」と大騒ぎするのです。そのあたりが現代のお母さんと重なって見えてきます。

一九八〇年代以降になってくると、いろいろな人魚のお話が出てきます。『スプラッシュ』というのはアメリカの映画です。物語の土台はアンデルセンと似ています。昔、溺れた男の子を助けた人魚がニューヨークにやってきて、青年になったその子と会い、陸で二人は恋に堕ちますが、今度は人魚姫が犠牲を払うのではなく、青年を海の中に連れて帰ってしまったのです。青年が「えいっ！」と決心して、海にドボンとはまってハッピーエンドという、すごい結末です。『スプラッシュ2』は、またその二人が陸に帰ってきて行ったり来たりするという話になります。

ディズニーでは、アンデルセンの童話を土台にした『リトルマーメイド』のお話があります。これも最初の作品は、結局最後のところで人魚姫がトリトンという王さまのお父さんから二本足をもらって陸に上がって、王子さまと結婚して、めでたしめでたしのハッピーエンドになります。『リトルマー

メイド2』になると、さらに人魚姫の産んだ娘が、陸ではやはり自分のアイデンティティが十分満たされないのので、もう一度海に戻って自己探索する話になっています。

心理学的な象徴で言えば、「陸⇨意識／言葉／父性／男性／人間」と「海⇨無意識／情動／母性／女性／人魚」の二層性の物語が描かれています。近代から女性たちは陸、すなわち男性原理の司る世界に憧れて、なんとかそこへ行くこうとする。子育てにおいても、「陸」の価値観をもたらしとします。しかし海にいる母親を殺したり、母親を海に残したりしたままでは、結局陸で十分に生きていくことができない。そういう二律背反をどう生きるかということが、ずっとテーマになってきたのです。

二重性からの解放を目指して

この大きな流れの中で、さらにここ一〇年、二〇年の間にも、ころころと母子を巡る規範は変わってきています。これは何とかして二重性を解消し、そこから解放されたいという試行錯誤にも見えます。まず、一九六〇年の神戸市の母子手帳から抜粋したものを紹介します。ここで綿々と綴られているのは、「人工栄養でもいい」「添い寝なんかはやめよう」「決まった時間におっぱいをやって、泣いてもすぐ抱いたらいけない」ということです。欧米式の、さっさと一人で寝かせましょうというところが母子手帳に書いてありました。これが、私の娘世代の母子手帳になるとどうなるかということですが、一九九七年のものを抜粋します。今度は「とにかく抱い

てあげましょう、抱き癖がつくなんて心配しなくていい。とにかく母子密着でいきましよう」ということが綿々と綴られています。大転換です。この転換期は、おそらく一九八五年あたりです。品川知美さんが「子育ての法の大転換」(『子育て法』革命)中公新書、二〇〇四年)だと書いておられます。子育て漫画やエッセーが登場してきたのもこの頃です。

漫画家の石坂啓さんが一九九三年に出された『赤ちゃんが来た』(朝日新聞社)という子育てエッセーがあります。私が最初の娘を産んだ年に出版されて、私の子育てのバイブルでした。子どもが胸にナプキンをくっつけて歩いてる絵があり「なんだかとてもあぶない感じ」と書いてあります。ナプキンというのは、生理用ナプキンです。なぜこんなことをしたかという、息子さんはよだれが非常に激しかったんですね。よだれかけを何枚かけかえても、ぐしょぐしょになって洗濯が間に合わない。ナプキンは後ろにテープがついてピタッとくっつく。これを胸にくっつけておけば取り替え自由、こんな楽なことはないという場面です。これはかなり極端な例ですが「ああ、こんなことありなんだ」と、目からうろこが落ち、あるべき子育ての方法にとらわれず、自分を中心に考えていいのだと、思い込みからすぐ解放された記憶がありました。

次は、翌年に出た内田春菊さんの『私たちは繁殖している』(ぶんか社)という漫画をご紹介します。九カ月の息子さんが、本を読んでいるお母さんのおっぱいを一生懸命飲んでいるのです。「いつまでもよく出るな。いつまで飲むんや」みたいな

感じの絵です。その二年後に井上きみどりさんが出された『子供なんか大キライ!』(集英社)という本もあります。ここに来ると「子どもが嫌い」ということを本のタイトルにできる時代になります。本音で子育てしようという人が出てきた世代です。

ざっと子育て漫画・エッセーを挙げてみましたが、ちょうど一九六〇年生まれの私を挟んで前後の世代の人たちの作品です。二重性、ダブルバインドを引き受けてしまった女性たちの、そこからいかに脱出したらいいかという模索から生まれた作品と考えられます。ダブルバインドを表現するのに、漫画やエッセーは非常にいい媒体だったのでしよう。二〇〇〇年になると、先ほど中里先生が紹介されたようなインターネットのサイトやブログによって、さらに表現の幅が広がり、現在に至ります。

こうした形で、なんとかがらみから逃れよう、母性神話から解放されようという女性たちの戦いがあります。しかし、最後に、問題はそう簡単ではないということを示し上げます。自分の楽しみのために、自分の成長のために、私が子育てをするのだという意識で女性たちが頑張ってきていることは、それはそれでよいことだと思います。ただ、男性が個人として父親になるという課題と、女性が個人として母親になるという課題とは決してパラレルではなく、どうしても女性個人にはなりきれないのです。やはり子どもを産んで母になるということは、非常に集合的な世界を生きる、本能的な世界を生きることです。「個」と「母性」は最終的にどうしても相

容れない部分を持っています。自己実現のために子育てをする、と頑張ってしまうと、子どもがうまく育ってくれないときに、自分が思ったようにできないときに、「これだけ努力しているのに駄目だ。自分はなんてできない母親なんだろう」と自分個人を女性が追いつめてしまう。この難しさをもっと意識化して、一人ひとりが考えていく必要があるのではないかと思っています。この辺で終わりたいと思います。ありがとうございます。
